

Oct. 14, 1997

聖書解釈学 Book Report

聖書解釈の歴史

---新約聖書から宗教改革まで---

出村彰・宮谷宣史編 / 日本基督教団出版局 1986年10月15日 初版発行

教職志願者コース・基礎科2年

野町 真理

A'
good

序論 聖書解釈史の課題と意義

第一部 古代

第一章 福音書における旧約聖書

第二章 パウロの旧約聖書解釈

第三章 アレクサンドリア学派の聖書解釈

フィロン

旧約聖書の神をギリシャ哲学の神と調和させることによって理解された神観にふさわしく寓話的解釈を行った。

オリゲネス

ギリシャ哲学に影響を受けた神観をもっていたが、旧約聖書に書かれた事柄をイエスに示された神観と教会に関連して解釈するという原理によって解釈を行った。しかし一方では聖書の各句において文字どおりの意味のほかには何かの深遠な隠れた霊的意味も発見しようとした。

第四章 アンティオキア学派

ディオドロス

解釈というものは実際に語られていることを超えてはならないとして、字義どおりの歴史的批判的解釈を主張。

アンティオキア学派は、聖書のテキストは何よりもまずそれが書かれた背景に照らして読まれ、歴史的に理解されなければならないと主張するが、同時に歴史的出来事を神の秘義と見る観方も保持していた。

第五章 ラテン教父たちの聖書解釈

アウグスティヌスの聖書解釈

- (1) 歴史的解釈方法：書かれている事柄が実際に起こったこととして解釈する方法。
 - (2) 原因論的解釈方法：なぜそのことが書かれたのかという理由を旧約聖書に求めて解釈する方法。
 - (3) 類比的解釈方法：新旧約聖書は矛盾するものではないという信仰によって解釈する方法。
 - (4) 比喩的解釈方法：記録された事柄が文字通りに受けとらえるべきでなく、象徴的に理解されなければならないと教えられる場合、それは比喩に従った方法である。
- ただしアウグスティヌスでは比喩的解釈とよばれているものの中に今日の学者たちが型に

よる解釈（予型論）と呼んでいる解釈方法が含まれている。

アンティオケア学派は文法的、歴史的原理を重んじて、アレクサンドリア学派の比喩的な解釈方法を受け入れなかったが、アウグスティヌスはそうした文字のアンティオケアと、比喩のアレクサンドリアとの総合をそこにおいてとげた総合者と見うけられる。

また、彼自身の内的発展という観点に立ってみると、マニ教に対しては旧約聖書と新約聖書との一致を示す方法を特に採用したけれども、後のペラギウスとの「自然と恩寵」の問題をめぐる論争においては、むしろ律法（自然）による義（恩寵）の完成を退け、キリストの贖罪の恩寵による完成を徹底して説き、自然と恩寵の区別を不明瞭にするペラギウスに対して、旧約聖書（律法）と新約聖書（愛）との違いの方を強制的に明らかにする解釈方法をとっている。その頃になると、「文字は殺し、霊は生かす」という使徒パウロの言葉に対する理解そのものも「文字」を「文字通り」の解釈とし、「霊」を霊的解釈としての「比喩的・象徴的解釈」と受けとめる解釈から脱し（『告白録』）、パウロ神学のコンテキストの中で、律法と福音という、贖罪論的キリスト論を軸にすえて解釈する方向へ向かっている。しかし、だからといって全く比喩的・象徴的解釈を止めその意義を軽くみたのではない。アウグスティヌスにおいては、旧約聖書と新約聖書はキリストの預言と証言において固く結びついている。彼の聖書解釈の方法を支えているのはそこにキリストを見、発見する方法である。しかし、アウグスティヌスは、聖書の啓示するキリストと出会うキリストの真理を見いだすことのできない精神について二つの原因をのべて強調する。その一つは、傲慢な心であるという。聖書の真理との出会いには探求する者自らの謙遜な心が要求される、と。聖書の真理は砕かれた魂にのみ開示される。第二は、聖書解釈の方法を知らないことである。

第二部 中世

第一章 サン・ヴィクトール学派

第二章 フランシスコ会学派の聖書解釈・盛期スコラ学に関連して

第三章 ドミニコ会神学者における聖書解釈

第三部 近世

第一章 人文学者たちの聖書解釈・エラスムスの校訂版新約聖書を中心に

エラスムスは、まず原典の再建を第一に重要な事としている。彼の聖書本文についての基本的見解の論点は二つにまとめられる。一つは、聖書本文、特にギリシャ語写本やラテン語訳の諸版に現存する過ちは、人間の作り出したものであるから、それは人間の手でもう一度正しいものに訂正されなければならないということである。もう一つは、聖書原典に手を加えることが冒とくであるという批判があったが、それに対する反論として展開される理論である。即ち、人間的過ちにもかかわらず、聖書の全体としての権威はいささかも失われる事はなかった。従って、誤っている部分を正しくすることは、もっと大切なことであり、信仰的な業として位置づけられなければならないという事である。「問題は、翻訳者、筆記者、歪曲する者によって生じてきたのです。もし、若干の誤った箇所故に、権威（聖書の…訳者注）が全体的に揺らぐのだとしたら、聖霊は、預言者や、福音書の記

者よりも、むしろ書記をこそ助けたことでしょう」と述べ、更に「人間によって歪められたものを、もう一度古い資料によって再建しようとする者こそ、真に聖霊に仕えているということになるのです」と、彼の基本的立場を示している。

人文学者たちに共通している事は、聖書解釈の基礎となるべき本文批評に関して、当時としては極めて厳密であり、かつ大胆な歴史的研究を導入しているという点である。これは、勿論、ルネッサンス・ヒューマニストたちの古典研究に刺激されるところが大きであったということ出来るが、聖書に対して、その真理性と権威を前提としながらも、人間的な要因、つまり人間の知性の過ちを正しく批判し、聖書という本書の中から出来るだけその過ちを取り除くことが、真理性を明らかにし、又自分の寄って立つべき立脚点を明確にすることであるという立場に立って、最小限必要な基礎的作業をなしたのである。

エラスムスにおいては、聖書解釈は、狭義の聖書神学に留まらず、歴史神学、組織神学、実践神学と我々が呼びならしている全領域と関わり、全体を内包した幅広いものとなっている。そして、このような人文学者の聖書解釈が異教古典の研究やその方法によっていた事も忘れてはならない。マルティン・ルターは後にそのような立場に対して厳しい批判を加えるようになるのであるが、人間の証言としての聖書の性格を考慮してみる時に、このような冷静な学問的作業こそが、聖書のメッセージを正しく伝えていくものであるという事も出来る。

第二章 ルター派の聖書解釈・改革者ルターを中心として

初期のルターが用いた聖書解釈法（四重の意味解説法）

聖書の語句には以下の四重の意味が含まれている。

- (1) 文字の意味---歴史的文字の意味のこと
- (2) 比喩の意味---テキストは教会に適用される
- (3) 転義的（道徳的）意味---テキストの個人に対する関係
- (4) 究極の意味---テキストの永遠的ないしは終末の意味を指す

後に四重の意味解説法の転義的意味を深く理解したことによって、ルターは伝統的なこの解説法を克服し聖書の一義性、明瞭性の確信へと次第に近づく。彼は1517年の「七つの悔い改めの詩の講解」ではこの四重の意味解説法を捨てている。ルターは中世以来の聖書解釈法を用いながら、彼自身の解釈法に到達し、これはやがて彼の義認論とかかわりを持つようになった。そして、義認論の骨組の中で中心的な意味を持つのはルターのキリスト理解であった。

彼の著作「奴隷的意志論」には聖霊が聖書理解のために必要な第一のものとして説かれていると共に、聖書理解には全体から部分へ、部分から全体へという往還が見られる。またルターは聖書を解釈するとき、その箇所が目指しているもの、目的や焦点、いわゆる *scopus* を明確にしている。

第三章 改革派

改革派が聖書釈義において維持した三つの特色

(1) ルター派が「信仰義認」の教理を聖書解釈においても中心に据えるのに対し、改革派では終始「教理の総体」が重要視され、特殊な教理条項に聖書解釈者の関心が集中することはなかったこと。

(2) 改革派の釈義においては一つの書あるいは一つの傾向に偏ることなく、全聖書を注解する傾向がある。

(3) 神学教育の中で人文主義的な語学教育が重んじられ、聖書を原語で釈義することが慣例となっている。近年この傾向は徐々に崩れてきている。

第四章 再洗礼派

解釈そのものの拒否が再洗礼派の解釈原理であった。彼らは宗教改革の「聖書のみ」を、原則的には「現に書かれてあるとおりの聖書のみによって」として受け止めた。再洗礼派の聖書解釈の立場は「直接・無媒介的」である。もともと解釈という営為は、ある文献の歴史的過去、すなわち現状況と、読む者の現在状況との落差を克服する努力を含むはずであるが、再洗礼派にあっては、聖書本文に含まれる命令や禁止を、特定かつ具体的な歴史状況の中に定位させるよりは、時間の経過や地理的隔たりを媒介とせずに、そのまま現実に適用しようとする。このため「脱状況性」によって「同時代化」が図られ、「だから…ねばならない」という新しい律法主義が生じる。幼児洗礼の否認、俗世との隔離主義、絶対平和主義もこの解釈から導き出される。

第五章 第一六世紀のカトリック